

令和4年度（第36回）山崎研究助成金伝達式 あいさつ

令和4年7月3日（日）

第36回山崎研究助成を受けられました皆さん、おめでとうございます。

皆さんの科学研究への旺盛な探究力と熱い思いに、まずもって敬意を表します。

そして、本日、この伝達式に出席していただいたことに対しまして、厚くお礼申し上げます。

また、本日はお忙しい中、御臨席を賜りました県教育委員会塩崎教育監に、感謝申し上げます。ありがとうございます。

さて、伝達式に当たり、以前、新聞で出会ったある「10代の自由研究 驚く成果を生み出すもの」というタイトルの社説について紹介したいと思います。

その記事は、「超絶的、涙が出るほど感動、想像以上に精緻。こんな言葉で、本職の研究者が称賛する小中高生の研究がある」という文章で始まり、まず、3つの研究を紹介しています。

一つ目は、埼玉県の小学校6年生の研究です。

夜行性のカブトムシが、昼間 庭の木にいるのを不思議に思い、専門家のアドバイスを受けながら、カブトムシが外来植物に出会ったことにより、新しい習性が引き起こされた可能性を突き止め、専門家と一緒にまとめた論文がアメリカの学術誌に載ったという研究です。

二つ目は、兵庫県の中学2年生のペルセウス座流星群に関する研究です。

夜明け前という観測しにくい時間帯に多く現れるので、科学館に相談すると、ハワイからのライブ映像なら、無理のない時間帯に観測できると教えられ観測してみると、最も多かったのは予想された日ではなく、その翌日であったことに気づき、原因を探り記録にまとめ、その内容が研究者を驚かせたという研究です。

三つ目は、熊本県の高校科学部の研究で、絶滅の恐れのある貝の卵から育てることに人工的に成功し、加えて、これまで肉食と考えられていた貝が、藻類も食べるという未知の生態も突き止めたという研究です。

社説は、この三つの研究を紹介した後、次のように述べています。「いずれも素朴な好奇心と行動、地道な観察と記録が結果につながった。成果を上げてポストや予算を獲得する重圧もなく、失敗を恐れずに自由な着想で挑戦できるのは、専門の研究者にない『強み』だ」、更に続けて、「『小中高生が本格的な研究をするのは難しい』というのは大人の思い込みだ。子どもたちにはアイデアも粘り強さもある。本職が見落としているテーマも多く、知識や経験、先端機器がなくても、プロと同等の成果が出せる可能性は十分ある」と長年理科教育に携わってきた方のコメントを紹介しています。

そして最後に、「自由な研究の効能は、本人の理解力や問題解決能力の向上にとどまらない。自然観察が地域の生態系の保護につながる場合もあるし、文系理系を問わず、相談を受けた専門家にとっては、新鮮な刺激を受け、次代の担い手を導くことに手応えを感じる機会にもなるだろう。疑問を突き止めようとする若者たちの活動を見守りたい」と結んでいます。

皆さんが、これから、研究を通してどのような新しい発見に出会い、どのような感動体験を積み上げていくのか、その貴重な一つ一つの歩みを聞かせてもらえることを楽しみに、私たちも、また、見守りたいと思います。

結びに、審査に当たられました飯田審査委員長をはじめ審査員の皆様、そして、日ごろから子どもたちの研究を支えてくださっている先生方、保護者の皆様、関係各位に感謝を申し上げ挨拶とします。

皆さん、本日は本当におめでとうございます。